

女子大学生の乳がんの早期発見行動を妨げる要因の研究

的場 久実 中西 伸子

奈良県立医科大学大学院看護学研究科

The Factor that impede early breast cancer detection behavior
in female university students.

Kumi Matoba Nobuko Nakanishi

Graduate School of Nursing , Nara Medical University

要旨

本研究の目的は、女子大学生の乳がんに関する早期発見行動の実態、早期発見行動を妨げる要因を明らかにすることである。18～24歳の看護系女子大学生(以下、看護系)、一般女子大学生(以下、文系)を対象とし、質問紙調査を実施した結果、看護系、文系ともにがんの罹患についての知識が低かった。自己検診実施率は、看護系 10.9%、文系 2.6%であった。自己検診を実施しない理由として、方法の認知不足が挙げられた。看護系の乳がん検診受診を妨げる要因として、時間的要因と乳がんの罹患意識不足、文系では費用的要因が明らかになった。

The purpose of the present study is to elucidate factors that impede early breast cancer detection behavior in female university students. Female nursing university students , and general female university students aged 18 – 24 years completed a questionnaire survey. Results indicated that knowledge regarding breast cancer was poor among both nursing students and general female students. The rate of self-examination was 10.9% in nursing students, and 2.6% in general female students. The reason for not performing self-examinations was attributed to a lack of knowing how to. Factors that impeded nursing students from undergoing breast cancer screening included time constraints and a lack of awareness about breast cancer morbidity. Amongst general female students, cost was identified as a factor.

キーワード：女子大学生、乳がん、発見行動

Keywords : female college students, breast cancer, detection behavior,

I. 緒言

近年、乳がんの罹患者数は年々増加傾向にあり、日本人女性における悪性新生物の罹患第1位となっている(厚生労働省, 2013)。乳がんは一次予防が難しい疾患であり、早期発見・早期治療が重要である。年齢階級別にみた女性の乳がんの罹患率は20歳を過ぎた頃から認められ、30歳半ばから増加しはじめ、

40～50歳代でピークを迎え、その後は次第に減少する(溝田ら, 2012)。木下ら(2013)は、乳がんの罹患率が低年齢化しており、20歳代で乳がん罹患する女性は増加傾向にあり、20代女性の啓発が必要だと述べている。

わが国では、乳がんのリスクが最も高い40歳以上の女性に対して2年に1回乳がん検診を推奨している(国立がん研究センター、

及び民間では乳がん啓発運動としてピンクリボンを象徴とした様々なキャンペーンを行っている(木下ら, 2013)。

乳がんの早期発見方法には、マンモグラフィ検査や超音波検査による乳がん検査、乳房自己検診がある(日本乳癌学会, n.d.)。しかし、40～69歳の乳がん検診率は34.2%と低い状態である(厚生労働省, 2016)。

野末ら(2004)の30～60歳女性652名に対する乳がん意識と乳房自己検診の実態調査によると、乳がんが早期発見で治ることを知っている者は半数以上であった。また乳房自己検診についての認知率は90.5%であるが、実施率は36%と低く、そのうち、毎月実施している者は44%であった(野末ら, 2004)。全体での実施率は15.8%という低さであった(野末ら, 2004)。中高年の乳房自己検診をしない理由として、触ってもわからない、やり方がわからないという意見が多い(野末ら, 2004)。

20歳以上の女性1166名を対象にした乳がん検診・乳房自己検診に対する意識調査によると、20歳代、30歳代に比べ40歳代以降の者の方が乳がんや乳房自己検診、乳がん検診に対する認知率が高い(鈴木ら, 2013)。年齢が若くなるにつれて乳がんや乳房自己検診、乳がん検診についての認知率は低くなっている。また看護女子大学生は乳がんに対する関心・知識はあるが(堤ら, 2012; 日下ら, 2011)、早期発見行動には至っていない(波崎ら, 2014; 日下ら, 2011)。平松ら(2000)は「乳房自己検診は青年期から乳房に対して関心をもち、習慣化させなければ定着するものではない」と述べている。青年期にある女子大学生が自己の乳房に関心を持ち、乳房自己検診の正しい方法の習得や習慣化すること、乳がん検診を定期的を受診することで死亡率の軽減につながると考える。

II. 研究目的

女子大学生の乳がんに関する早期発見行動の実態を知り、乳がんの早期発見行動を妨げ

る要因について明らかにする。乳がんの早期発見行動を普及させるための基礎資料とし、乳がんの早期発見行動をとるための支援方法を検討する。

III. 用語の定義:

乳がんの早期発見行動(以下、早期発見とする): 乳房自己検診(以下、自己検診とする)の実施や乳がん検診(超音波検診、マンモグラフィ検査)を受診する行動のこととする。

IV. 方法

1. 研究デザイン: 量的研究

2. 対象者: 研究内容に同意が得られた看護女子大学生(以下、看護系)1～4年生、一般女子大学生(以下、文系)1～4年生とした。

3. データ収集施設と収集期間

1) 収集施設:

A県のB大学、C大学と、D県のE大学、F県のG大学、計4施設。

2) 収集期間:

平成28年4月～平成28年9月末

4. 調査手順と方法

1) データ収集方法

担当教員に許可を得た講義の後の休憩時間に無記名自記式アンケートを配布した。看護系および文系の回収方法はアンケートをその場で記入した者は入り口に設置してある回収ボックスにて回収した。文系でその場で記入しなかった調査票方は郵送法にて回収した。

2) データ収集項目

(1) 個人属性

(2) 研究者作成の質問項目

- ①乳がんや乳がんの早期発見についての関心の有無、基礎知識、情報源
- ②自己検診の実施状況とその理由
- ③乳がん検診の受診状況とその理由

5. 分析方法

「乳がんについての知識・乳がんを早期発見するための知識」と「自己検診を妨げる要因」、「乳がん検診を妨げる要因」等により女子大学生の乳がんの早期発見行動を妨げる要因

を明らかにするために分析した。

分析は“IBM SPSS VER.22.0 for Windows”を用いて行った。独立性の検定は χ^2 検定、順位尺度に関しては、Mann-WhitneyのU検定、2群間の平均値の差はt検定を行い、相関についてはPersonの積率相関係数を算出し、順位尺度に関してはSpearmanの順位相関係数を求め、有意水準5%未満とした。

6. 倫理的配慮

アンケート用紙は個人が特定されないよう無記名とし、アンケート用紙の提出、返送をもって研究への承諾を得た。調査実施に際し、対象者には研究目的、研究協力の内容と方法、個人プライバシーの保護、収集データの取り扱い方法、個人への利益・不利益、自由意志による参加、研究成果の公表、収集データの破棄方法等について口頭または文章にて説明した。なお、本研究は奈良県立医科大学医の

倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号1225)。

V. 結果

1. アンケート用紙の回収結果

全体の回収率 72.1%(600/832)で有効回答の551を分析対象とした(有効回答率91.8%)。

2. 対象者の属性

表1に対象者の属性を示した。

1) 年齢、学年について

対象者全体の平均年齢は 19.4 ± 1.2 (平均 \pm 標準偏差)歳であり、18から23歳であった。学部別では、看護系の平均年齢が 20.0 ± 1.3 、文系の平均年齢が 18.9 ± 1.0 であった。看護系と文系の学年間の人数に差がみられ文系の1年生が有意に多かった。乳がんの周囲罹患者に関しては、文系、看護系に有意な差はみられなかった。

表1. 対象の属性

	属性	看護系 (n=248)		文系 (n=303)		P値
		(人)	(%)	(人)	(%)	
学年	1年	57	23.0	177	58.4	.000***
	2年	66	26.6	72	23.8	
	3年	62	25.0	39	12.9	
	4年	63	25.4	15	5.0	
居住形態	一人暮らし	23	9.3	60	19.8	
	実家	224	90.3	231	76.2	
	寮	0	0.0	7	2.3	
	その他	1	0.4	5	1.7	
周囲の乳がん罹患者	あり	47	19.0	50	16.5	.589
	なし	199	80.2	239	78.9	

Pearsonの χ^2 検定 p<.001***

3. 看護系、文系の乳がんの早期発見にむけての要因について

看護系、文系の乳がんの早期発見に向けての要因について調査項目別に看護系文系に分けて集約し、看護系と文系の間で検定し、大

学による差をみた。

1) 乳がんに関する知識

乳がんに関する知識について、最も知っている項目は、「早期発見が重要」であり、知っている項目は看護系、文

系それぞれ 240 名(96.8%)、259 名(85.5%)であった(表 2)。また「早期発見の方法にマンモグラフィ検査がある」については、看護系、文系それぞれ 191 名(77.0%)、94 名(31.0%)であった。「早期発見の方法に超音波検査がある」については、看護系、文系それぞれ 147 名(59.3%)、79 名(26.1%)であった。看護系と文系の間で乳がんに関する知識について χ^2 検定した結果、ほとんどの項目は看護系が有意に多かった。文系に有意に多かった項目は「早期発見が重要」と「乳がん罹患者の増加」であった。

一方、看護系、文系ともに「日本人女性の乳がんの罹患率」、「何歳から乳がん罹患者の増加するか」、「乳がんの罹患年齢」について知っているとした者は少なかった。

2) 乳がんの早期発見の知識

乳がん検診の知識について、「乳がん検診の内容の 1 つにマンモグラフィ検査がある」を知っていた者は看護系、文系それぞれ 192 名(77.4%)、99 名(32.7%)であった。「乳がん検診の内容の 1 つに超音波検査がある」については、看護系、文系それぞれ 148 名(59.7%)、78 名(25.7%)であった。「超音波検査は 20～30 歳の女性に適している」については看護系、文系それぞれ 26 名(10.5%)、20 名(6.6%)と低値であった。

3) 乳がんの早期発見の実態

乳がんの早期発見の実態を表 3 にまとめた。看護系の乳がんの早期発見の実態については、自己検診を認知している者は 120 名(48.4%)いたのに対し、自己検診方法を認知している者は 56 名(22.6%)。自己検診の実施者は 27 名(10.9%)という結果が得られた。

表 2. 乳がんに関する知識

	看護系 (n=248)		文系 (n=303)		P 値
	(人)	(%)	(人)	(%)	
早期発見が重要	240	96.8	259	85.5	.000***
早期発見の方法にマンモグラフィ検査がある	191	77.0	94	31.0	.000***
早期発見の方法に超音波検査がある	147	59.3	79	26.1	.000***
家族歴があるとリスクが高くなる	188	75.8	165	54.5	.000***
乳がん罹患者の増加	177	71.4	182	60.1	.001**
日本人女性の乳がん罹患率	23	9.3	20	6.6	n.s
何歳から乳がん罹患者の増加するか	36	0.8	27	0.0	.01*
乳がんの罹患年齢	44	17.7	30	9.9	.001**

Pearson の χ^2 検定 *;p<.05 **;p<.01 ***;p<.001

n.s.: not significant

表 3. 乳がんの早期発見の実態

		看護系 (n=248)		文系 (n=303)		P 値
		(人)	(%)	(人)	(%)	
乳がんに対する関心	あり	218	87.9	228	75.2	.000***
乳がんの早期発見に対する関心	あり	200	80.6	210	69.3	.002**
乳がんの早期発見に対する意欲	あり	218	87.9	235	77.6	.005**
自己検診の認知	あり	120	48.4	94	31.0	.000***
自己検診の方法の認知	あり	56	22.6	37	12.2	.001**
自己検診の実施	あり	27	10.9	8	2.6	.000***
乳がん検診の受診	あり	2	0.8	0	0.0	

Pearson の χ^2 検定 **:p<.01 ***:p<.001

表 4. 自己検診を実施しない理由

	看護系 (n=248)		文系 (n=303)		P 値
	(人)	(%)	(人)	(%)	
やり方がわからない	168	71.5	248	82.9	.000***
心配していない	48	19.4	94	31.0	n.s
自分の年では関係ない	27	10.9	79	26.1	n.s
家族に乳がんの人がいない	24	9.7	165	54.5	n.s
乳がんには罹患しないと思う	10	4.0	182	60.1	n.s
必要がない	3	1.2	20	6.6	n.s
忘れる	32	12.9	27	8.9	.000***

Pearson の χ^2 検定 ***:p<.001

n.s.: not significant

表 5. 自己検診に関するニーズ

	看護系 (n=235)		文系 (n=299)	
	(人)	(%)	(人)	(%)
無料で自己検診の方法を確認して欲しい	102	43.4	160	53.5
自己検診を実施する目安がわかるアプリが欲しい	132	56.2	108	36.1
無料で自己検診の指導をして欲しい	121	51.5	153	51.2
その他	3	1.3	3	1.0

3) 乳がんの自己検診を実施しない理由

自己検診を実施しない理由として、「やり方が分からない」と回答した者は看護系、文系それぞれ 168 名(71.5%)、248 名(82.9%)で最も多かった(表 4)。看護系の自己検診を実施しない理由として、109 名(46.4%)の者が乳がんの罹患意識に関連する項目(「心配していない」、「自分の年では関係ない」、「家族に乳がんの人がいない」、「乳がんに罹患しないと思う」、「必要がない」)を挙げていた。

また「やり方がわからない」、「忘れる」において看護系と文系の間に有意な差がみられた。「やり方が分からない」は文系が有意に高かった。「忘れる」においては看護系が有意に高かった。

4) 自己検診に関するニーズ

欲しいサービスとして、全体では「無料で自己検診の指導を実施して欲しい」が 274 名(51.3%)、「無料で自己検診の方法を確認して欲しい」が 262 名(49.1%)の順で多かった(表 5)。

学部別では、看護系では「自己検診を実施する目安がわかるアプリが欲しい」が 132 名(56.2%)で最も多かった。文系では「無料で自己検診の方法を確認できる場所が欲しい」が 160 名(53.5%)で最も多かった。

5) 乳がん検診に関するニーズ

乳がん検診に関するニーズについては、「無料券」と回答した者は看護系、文系それぞれ 189 名(76.8%)、215 名(71.0%)で最も多かった(表 6)。

6) 乳がん検診を受診しない理由

乳がん検診を受診しない理由として看護系では「時間がない」91 名(37.0%)、「時間がかかりそう」75 名(30.5%)の順で多かった。文系では「料金が安い」が 85 名(28.1%)で最も多かった。

また乳がん検診を受診しない理由として、全体、看護系、文系それぞれ 214 名(39.0%)、121 名(49.2%)、93 名(30.7%)の者が乳がんの罹患意識に関連する項目(「時間がない」、「自分の年齢では必要ない」、「乳がんに興味がない」、「罹患しないと思う」、「予約するのを忘れる」)を挙げていた(表 7)。乳がん検診を受診しない理由として、全体、看護系、文系それぞれ 324 名(59.0%)、141 名(60.4%)、183 名(57.3%)の者が乳がん検診に対する精神的要因に関連する項目(「恥ずかしい」、「男性技師に検査されるのが嫌」、「乳がんが見つかるのが怖い」、「マンモグラフィ検査が痛そう」、「不要な放射線を浴びそう」、「検診方法がわからないため不安」)を挙げていた。

表 6. 乳がん検診に関するニーズ (複数回答)

	看護系 (n=246)		文系 (n=303)	
	(人)	(%)	(人)	(%)
無料券	189	76.8	215	71.0
検診の人が女性	105	42.7	147	48.5
友人と一緒に	38	15.4	47	15.5
母親や姉妹と一緒に	64	26.0	94	31.0
子宮頸がん検診などほかの検診と一緒に	103	41.9	98	32.3
その他	7	2.8	5	1.7

表 7. 乳がん検診を受診しない理由

	看護系 (n=246)		文系 (n=303)	
	(人)	(%)	(人)	(%)
時間がない	91	37.0	64	21.1
時間がかかりそう	75	30.5	71	23.4
自分の年齢では必要ない	71	28.9	79	26.1
料金が安い	56	22.8	86	28.4
マンモグラフィが痛そう	47	19.1	29	9.6
検診方法がわからないので不安	36	14.6	60	19.8
恥かしい	21	8.5	32	10.6
男性技師に検査されるのが嫌	21	8.5	31	10.2
乳がんに興味がない	20	8.1	27	8.9
乳がんが見つかるのが怖い	13	5.3	30	9.9
乳がんは罹患しないと思う	12	4.9	12	4.0
検診の予約を忘れる	10	4.1	2	0.7
不要な放射線を浴びる	3	1.2	1	0.3

VI. 考察

今回、女子大学生の乳がんに関する早期発見行動の実態、早期発見行動を妨げる要因を明らかにする目的で、看護系、文系を対象とし、無記名自記式質問紙を実施した。結果、女子大学生は乳がんの罹患についての知識が低いことや健診実施者は看護系でも2名のみであり、乳房自己検診は文系・看護系ともに実施率が低いことが明らかになった。以下看護系・文献の乳がん検診受診を妨げる要因について考察する。

1. 女子大学生(看護系、文系)の乳がんの知識に関する現状

女子大学生では乳がんの統計・疫学に関する3項目(「日本人女性の乳がんの罹患率」、「何歳から乳がんは罹患する女性が増加するか」、「乳がんの罹患年齢」)について認識している者は少なかった。これらのことにより、自分が罹患する可能性があることを認識していないことが考えられる。20歳代で乳がん

罹患する者は少ないが、年々増加傾向にある(木下ら, 2013)。そのため、女子大学生の支援として、大学の学園祭などで保健師や助産師などの専門家により乳がんの知識を普及し、乳がんが身近な疾患だということを周知させる必要があると考える。また乳がんや自己検診についてまとめられた冊子を配布することも必要である。

2. 女子大学生の自己検診実施を妨げる要因

女子大学生の自己検診を実施しない理由として、「やり方がわからない」が最も多く、看護系、文系それぞれ71.5%、82.9%であった。また女子大学生の自己検診に関するニーズとして「自己検診の指導をして欲しい」、「自己検診の方法を確認して欲しい」という意見があった。このことから「方法が分からない」ということが自己検診を妨げる要因の1つだと考える。富士岡ら(2011)は乳房の腫瘍の触知は、実際に乳房モデルに触れるなどして感覚で覚える必要があり、紙面や視聴覚機器などの情報では、なかなか理解しにくいと述べている。また、自己検診は月に1回、月経の

終わり頃を目安に行うことを推奨している(田島ら, 2005)。そのため、女子大学生が自己検診の手技を習得できるように実践的な指導と必要な実施時期や頻度についての説明が重要だと考える。例えば、大学の学園祭などで保健師や助産師などの専門家により乳がんの知識を普及し、乳がんが身近な疾患だということを周知させる必要があると考える。自己検診に関しては、乳房モデルを用いた実技指導を行ったり、乳がんや自己検診についてまとめられた冊子を配ったりする必要があると考える。さらに、大学や市町村、地域のクリニックなどが協力し、いつでも自己検診の方法を確認できる場を提供していく必要があると考える。

3. 女子大学生の乳がん検診受診を妨げる要因

女子大学生の乳がん検診を受診しない理由として、乳がん検診に対する精神的要因に関連する項目(「恥ずかしい」、「男性技師に検査されるのが嫌」、「乳がんが見つかるのが怖い」、「マンモグラフィ検査が痛そう」、「不要な放射線を浴びそう」、「検診方法がわからないため不安」)を挙げている者が半数を超えていた。それぞれの項目への支援が必要だと考える。

水木暢子ら(2006)の30歳以上の者を対象にした乳がん検診受診状況と自己検診に対する意識調査では、若年層や未婚者は羞恥心のために乳がん検診を受診するのが億劫な傾向があるとされている。そのため、女性医師や女性技師を増やしていくことや、プライバシーの確保、羞恥心の配慮が今後さらに必要だと考える。また佐々木ら(2006)の更年期女性における乳がん検診受診率向上をめざした健康教育プログラムの効果に関する研究によると、乳がんの統計・疫学などの現状や自己検診・乳がん検診の効果、方法について講座を行っている。講座前後で、乳がん検診に対する意識について「受診するのが恥ずかしい」、「病気がみつかるのが怖い」において、受講後のほうが有意に低くなっていた(佐々木ら, 2006)。このことから、乳がんの現状や自己

検診・乳がん検診の効果、方法についての講義を女子大学生にも行っていくことで、自己検診実施率や乳がん検診受診率の向上につながると考える。

マンモグラフィ検査は乳房を挟むことに疼痛が伴うので「痛かった」という評価が多く、検査への不安となっている。乳房を薄く伸ばすことで、放射線被曝量を少なくすることができる(木下ら, 2013)。また、マンモグラフィ検査は乳がんの死亡率を減少させたという報告もある(日本乳癌学会, 2016)。このようなベネフィットを伝えていくことが必要だと考える。若年女性は、乳がんや乳がんの早期発見に関する情報源としてテレビが半数を占めており、知識をもつことに大きく影響を与えていた。日下ら(2011)は、テレビは若年の情報源として視聴覚に直接働きかける重要なメディアであると述べている。メディアなどで乳がん検診の必要性、利点、配慮していることなどを伝達していくことが大切だと考える。

4. 看護系の自己検診実施を妨げる要因

看護系で自己検診を認知している者は約半数だったのに対し、自己検診の方法を認知している者は約2割、自己検診実施者は約1割と低値であった。また看護系では自己検診を実施しない理由として「方法がわからない」、「忘れる」を挙げている。これらのことから、自己検診自体を知らないこと、自己検診の方法がわからないこと、実施するのを忘れることが自己検診の有無に影響していると考えられる。また看護系は授業で自己検診について学習しているため、授業で一度学習しただけでは習得、習慣化につなげるのは難しいことが示唆されたと考える。そのため、モデルを用いた実技授業の機会を増やしていく必要があると考える。

また看護系の自己検診を実施しない理由として、46.4%の者が乳がんの罹患意識に関連する項目(「心配していない」、「自分の年では関係ない」、「家族に乳がんの人がいない」、「乳がんには罹患しないと思う」、「必要がない」)を挙げている。これは、乳がんの知識での問

いで乳がんの統計・疫学(「乳がんの罹患年齢」、「何歳から乳がん罹患するか」、「日本人女性の乳がんの罹患率」)について認識が低かったことから自分が罹患する可能性があることの認識が低いことが影響していると考え。Clark JK et(2000)の米国 Indiana 州で高校1年生を対象に行った調査によると、乳がんに関する1時間の教育によって乳がんや自己検診に関する知識の習得や自己検診の実施率が向上したと述べている。研究対象とした20歳前半は、罹患率が低いが、食生活の欧米化などにより20歳代で乳がん罹患する者は増加傾向にある(木下ら, 2013)。そのため、乳がんは身近な病気であることや自己検診の方法を周知させる場を提供していく必要があると考える。

5. 看護系の乳がん検診受診を妨げる要因

看護系の乳がん検診を受診しない理由として、時間的要因が半数を占めていた。この結果は日下ら(2011)の看護系400名を対象にした調査と一致するため、時間的要因が乳がん検診を受診しない要因の1つだと考えられる。これは、学校のカリキュラムとの関係が考えられる。また、日本の病院は待ち時間が長いことも関係していると考え。また、看護系の約半数の者が、乳がんの罹患意識に関連する項目(「時間がない」、「自分の年齢では必要ない」、「乳がんに興味がない」、「罹患しないと思う」、「予約するのを忘れる」)を挙げている。看護系は乳がんに関する統計や疫学に関する認知率は低い。そのため、自らが乳がん罹患する可能性があることの認識が不足しており、それが乳がん検診受診を妨げる要因の1つだと考える。このことから、定期健診時に乳がん検診の項目を増やすといったことを市町村などの行政に要望していく必要があると考える。また約半数の者は乳がんの罹患意識に関連する項目以外のことを理由に乳がん検診を受診していないことが示唆された。看護系は「乳がんは早期発見が重要」についての認知している者はほぼ全員であった。早期発見の方法として「マンモグラフィ検査が

ある」の認知率は約8割、「超音波検査がある」の認知率は約6割であった。さらに、乳がん検診の内容として「マンモグラフィ検査がある」の認知率は約8割、「超音波検査がある」の認知率は約6割であった。これらのことから、乳がんに関する統計や疫学に関する知識を備えており、乳がんの早期発見行動について認知しているが、その行動をとっていない者がいるということが示唆されたと考える。

6. 文系の乳がん検診受診を妨げる要因

文系の乳がん検診を受診しない理由については、費用的負担が最も多かった。乳がん検診に関するニーズで看護系、文系ともに「無料券」と答えた者が7割と最も多かった。また菅野ら(2012)の地域における乳がん検診の現状とその問題点についての調査によると、無料クーポンは初回の乳がん検診受診の動機づけに有効であると指摘している。そのため、行政サービスとして、費用面のサポートが必要だと考える。また乳がん検診に関するニーズで少数ではあるが、学校の定期健診の時に受診したいという希望があった。医療者が行政に乳がん検診を学校の定期健診時に受診できるようにする、または、無料券や割引券の要望する必要があると考える。また、我が国では40歳以上の者に対して、2年に1回乳がん検診を推奨している(国立がん研究センター, 2015)。しかし、20歳から罹患する者は現在少数ではあるが増加傾向である(木下ら, 2013)。その影響として、食生活の欧米化などがあるため(木下ら, 2013)、今後さらに増加すると推測する。そこで、20歳以上の者にも乳がん検診を推奨すべきだということを行政に訴えていくべきだと考える。

7. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、看護系・文系の平均年齢および学年にばらつきが見られたため、一般化が難しいと考える。そのため、今後、学年構成を整えた検討が必要だと考える。

今後の課題として、実際に女子大学生に乳がんや乳がんの早期発見行動に関する教育プ

プログラムを考案、実践し教育効果を明らかにすることである。

VII. 結論

今回、女子大学生の乳がんに関する早期発見行動の知識や行動の実態を知り、乳がんの早期発見行動を妨げる要因について明らかにすることを目的で研究を行った。その結果、乳がんの早期発見行動を妨げる要因について以下のことが明らかになった。

1) 乳がんの知識については、看護系、文系の間で有意な差がみられ、文系のほうが知識が低いという結果が得られた。

2) 「自己検診の認知」、「自己検診の方法の認知」において看護系、文系の間で有意な差があった。文系のほうが認知率が低かった。看護系で自己検診を認知している者が約半数だったのに対し、自己検診の方法を認知している者は約2割と低値であった。

3) 女子大学生の自己検診を実施しない理由で最も多かったのは、「方法がわからない」であった。また、看護系の約半数の者が自己検診を実施しない理由として、乳がんの罹患意識に関連する5項目を挙げていた。

4) 乳がん検診の知識については、看護系は6項目中、「乳がん検診の内容にマンモグラフィ検査・超音波検査がある」に関する認知率は約半数であった。文系では全ての項目において認知率が半数以下であった。

5) 乳がん検診を受診しない理由として、看護系では時間的要因と乳がんの罹患意識に関連する5項目が半数を占めていた。文系では、費用的負担が最も多かった。また、女子大学生では半数以上の者が、乳がん検診に対する精神的要因に関連する6項目を挙げていた。

今回の研究を行うにあたり、調査にご協力くださいました学生の方々ならびに各大学の先生方、奈良県立医科大学飯田順三教授、石澤美保子教授、五十嵐稔子教授をはじめとした女性健康・助産学の先生方に心より感謝いたします。

この発表は奈良県立医科大学大学院看護学研究科に提出した修士論文の一部を発表したものです。

引用文献

Clark J. K., Sauter M., Kotecki J. E. (2000) : Adolescent girls' knowledge of and attitudes toward breast self-examination: evaluating an outreach education program. *J Cancer Educ* : 15(4), 228-231.

富士岡幸, 綿貫恵美子, 小林伸行. (2011) : 乳房検診受診者における乳房自己触診の意識と実態. *北里看護学誌*, 13(1) : 1-8.

平松喜美子, 井上寿美子, 竹内祐子. (2000) : ヘルスビリーフモデルの視点からみた乳癌の自己検診についての検討. *鳥取大学医療技術短期大学部紀要*, 32 : 21-26.

菅野壮太郎, 大塚博紀, 河村正敏. (2012) : 地域における乳がん検診の現状とその問題点. *人間ドック*, 27(1) : 73-80.

国立がん研究センター. 2015

http://ganjoho.jp/data/public/qa_links/brochure/odjrh3000000ul0q-att/144.pdf

国立がん研究センター がん情報サービス :

“乳がん 受診から診断、治療、経過観察への流れ”. 国立がん研究センター. 2017-03-

国立がん研究センター. 2015

http://ganjoho.jp/data/public/qa_links/brochure/odjrh3000000ul0q-att/144.pdf

国立がん研究センターがん対策情報センター. 2012

http://ganjoho.jp/public/pre_scr/screening/breast_cancer.html

厚生労働統計協会. (2016) : 国民衛生の動向 2016/2017. 厚生労働統計協会.

日下知子, 渡邊有紀. (2011) : 青年後期女性の乳房自己触診行動を妨げる要因:看護学生を対象として. *川崎医療短期大学紀要*, 31 : 15-20.

水木暢子, 日景真由美, 木村千代子他.

(2006) : A市における乳がん検診受診状況

- と自己検診に対する意識. 日本看護学会論文集:地域看護, 37 : 152-154.
- 溝田友里, 山本精一郎. (2012) : 乳がんの疫学 日本における乳がんの疫学的動向. 日本臨床, 70(7) : 37-41.
- 波崎由美子, 田邊美智子, 佐々木綾子.
(2014) : 母親と娘の乳がんに関する知識・意識, 伝達の実態-医療系・非医療系女子大学生とその母親の比較. 福井大学医学部研究雑誌, 14(1) : 55-66.
- 日本乳癌学会. n.d.
<http://jbcs.gr.jp/guidline/p2016/guidline/g2/q06/>
- 野末悦子, 島田菜穂子, 沢井清司他. (2004) : 一般女性の乳癌意識と自己検診実態—乳房健康研究会のアンケート調査から— . 日本乳癌検診学会誌, 13(3) : 249-257.
- 佐々木綾子, 波崎由美子, 山田須美恵他.
(2006) : 更年期女性における乳がん・子宮がん検診受診行動の影響要因と受診率向上をめざした健康教育プログラムの効果に関する研究. 福井大学医学部研究雑誌, 7(1-2) : 15-28
- 鈴木久美, 林直子, 樺沢三奈子他. (2013) : 成人女性の乳がんおよび乳がん検診・自己検診に対する意識調査. 保健の科学, 55(1) : 63-70.
- 田島知朗, 田中洋一, 片野智之他. (2005) : 乳房自己検査と視診・触診. 産科と婦人科, 1(15) : 15-21.